

# 大学入学共通テストについて



## 1 問題の概要

第1・2問は共通テストの試行調査問題の出題形式、第3問に従来型の問題文が残された。また、第4問は、1ページにわたる会話文で問題が始まる。これは、従来のセンター試験の第1問の形式を継承したものである。最初の共通テスト「倫理」の印象としては、センター試験と試行調査問題を足して2で割ったような印象であった。

ただ、細部に目をやると、共通テストの目指すものが見えてくる。単なる事項の暗記ではなく、それを使って考える力を問いたい——この理念に従って、知識・理解と思考力・読解力を結びつけようとする努力が見られた。しかし、「倫理」という科目に固有の知識・理解を必要とせず、思考力・読解力だけで正答を導くことのできる設問が相当数あった。平均点が高かった一因がここにあるだろう。

その反面、問われた知識がやや細かかったことも目立った。董仲舒の天人相関説、スンナ派のカリフ、ヘーゲルの自己外化など、学習が及ばなかった生徒もいたのではないだろうか。倫理学習の中心人物とその思想を手掛かりに、生徒に思考力・読解力をつけたい。そのために、知識と思考、その両者をどう有機的に結びつけてゆくか。作問者だけではなく、教育現場の教員にとっての大きな課題である。

また、会話の多用、身近な具体的事例への言及にも触れなければならない。試行調査問題と比べると、図版の減少や、設問形式の整理などがあった。しかし、メモ、レポート、調べ学習など、生徒の学習活動に寄り添う姿勢、生徒の目線から問題作成という点では、目指す方向ははっきりしている。インターネット上では、最後の第4問の高校生PとQの仲を案じる声もあった。半ば冗談であれ、そのような関心を呼ぶ身近な問題が求められているといえる。

今後、新教育課程に向けて、共通テストもさらに変化するものと考えられる。センター試験も、受験科目「倫理・政経」の導入など、節目節目で大きく変わってきた。作問者の入れ替えもあるだろう。難易度もどのように落ち着いてゆくのか。ここ数年の動きから目が離せない。

## 2 出題傾向

今回の共通テストをめぐるデータについて、以下の表にまとめた。数字の上でも、今回の共通テストがセンター試験と試行調査問題の間にあることが分かる。また、青年期・現代社会の諸課題の位置が安定しない。来年度、第1問に置かれてもおかしくない。

### ■ 共通テストの出題分野

大問	小問数	分野
第1問	8	源流思想
第2問	8	日本思想
第3問	8	西洋思想
第4問	9	青年期・現代社会の諸課題

### ■ 共通テスト・センター試験・共通テスト試行調査問題の比較

	センター試験	共通テスト試行調査	共通テスト
小問題数	37	32	33
問題冊子ページ数	34	38	35
図版数	0	8	3
資料数	4	9	9
平均点	65.37	55.2	71.76

\* 共通テストの「資料数」について、資料が選択肢の場合は除く。

\* 共通テストの「平均点」は、中間集計のもの。

### ■ 共通テストの出題形式

#### リード文

第1・2問は試行調査問題に従って、従来の問題文はなく、短い会話、資料などから、設問を展開している。第3問は、従来のセンター試験にあった1ページにわたる問題文。第4問も、従来のセンター試験第1問の長い対話から問題が始まっている。

#### 試行調査問題にあったが、共通テストではなかった形式

(1)ある項目を自由に選択し、その後に、その選択に連動した設問が続くという連動型。

(2)空欄【 X 】として、その内容を伏せたまま問う。

①空欄に入る用語・言葉を、会話を通じて突き止めていく。

②空欄の用語・言葉を問うのではなく、その空欄に関連する思想家の思想を問う。

(3)適当なものを、二つ選べ。

(4)当てはまるものすべてを8つの選択肢から選択する。

話題となっていた「連動型」や、生徒が手を焼いていた「空欄 X」であるが、煩雑でページ数が増え

る、正答率が極端に低くなったりする（(4)は255通りの組合せがある）などの問題から、採用が見送られたと考えられ、全体にシンプルになった。

## **共通テストで特徴的であった設問の形式・内容**

### **(1) 分野の横断**

従来からみられた源流の分野間を横断する設問（解答番号1・5）だけでなく、日本思想と古代ギリシア思想（解答番号9）、青年期と西洋思想（解答番号17）を関連させた設問や、青年期で扱われることの多い『エミール』を資料として「良心」について問う（解答番号19）などが見られた。

試行調査問題では、和辻哲郎の『倫理学』からの資料をもとに、「共通する観点を含む見方」を、源流、西洋近代思想、現代思想から選ばせるという設問が目をつけた。この分野の横断という方向は今後も続きそうである。

### **(2) 思想の比較**

(1)で触れた「分野の横断」にも関連するが、思想を比較・対照し、批判・継承関係や、類似点・相違点などを考えさせる設問も目立った。諸子百家、ソクラテスとキケロ、『古事記』と『神統記』（解答番号6, 8, 9）である。

さらに、思想家の比較ではないが、福音と律法、慚と愧、問題焦点型と情動焦点型（解答番号2, 4, 28）など、対立する概念を設定することも目立った。

### **(3) 国語力・読解力の設問**

9問で国語力・読解力が決め手となった。このうち、例えば、ブッダゴーサ『アッタサーリーニー』によって、「慚愧」の意味が生徒の日常的場面に即して問われた（解答番号4）。プラトン『ソクラテスの弁明』・キケロ『友情について』の二つを比較し、「恥・評判・名誉」について考えさせる問題も出題された（解答番号8）。また、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』の中の対話を使った空欄補充の組合せも出題された（解答番号23）。

さらに、以下の3問も、知識に加えて読解力が正解の決め手となっている。諸子百家についての知識とともに、資料を読解させる問題（解答番号6）、『古事記』は知識を問うているが、『神統記』は読み取り問題（解答番号9）、フロイトのエス・自我・超自我は知識を問うているが、空欄は読解力を問う問題（解答番号28）。

つまり、33問中の上記の12問、3分の1以上の設問が国語力・読解力を求めているのである。特に気を付けたいのは、第3・4問それぞれの最後の設問である。第3問では、最初の1ページにわたる問題文を読んだ生徒と先生の会話という設定で、この会話も1ページ近くの分量である。そのためか、選択肢はそれぞれ1行と短い。従来のセンター試験の定番であった大問ごとの「趣旨問題」に準じたものである。また、第4問でも、最初の1ページにわたる「会話を踏まえて」、生徒のレポートの空欄を補充するというものであり、大問全体のまとめともいえる設問である。最初の問題文や会話に戻って、大問全体を振り返るという意図は分かるが、今後この形式がどうなるのか注目したい。

なお、「他の〇〇ページを参照」させる設問は他にもある（解答番号4, 30）。全体を有機的に関連付け、統一したテーマを設定し、思索を深めてゆく過程をたどるものである。

#### (4) 図版・統計資料の問題

図版の数は大幅に減った。設問に直接関係するのは、来迎図の1問(解答番号10)だけである。「今日もまた流会か」「実験動物慰霊碑」の二つは手掛かりとしてのもの。芸術分野では図版は使われなかった。ただ、出題された図版を使った設問は、2ページにわたる本格的なものである。是非とも慣れておきたい。同じように、統計読み取り問題(解答番号31)も、2ページにわたるものである。実験の意図・手順の理解が求められている。

#### (5) 日常の具体的場面や現代社会の諸課題に結びつける

発表の準備(解答番号4)、夢殿の観世音像(解答番号16)、良心についての「身近な事例」(解答番号19)、『君たちはどう生きるか』の会話(解答番号23)、ストレスへの具体的対処(解答番号28)、バリアフリーの具体例(解答番号29)など、試行調査問題に引き続き、思想の具体的理解を問う設問も目立った。

### ③ 大問分析

#### ■ 第1問 源流思想 (24点 小問8問)

Iは、授業での発表をめぐる高校生2人の会話を材料に、「恥」について考えたものである。

問1 やや細かい知識が問われている。このような設問が最初に置かれていることに、作問者のメッセージを感じることもできるだろう。②荀子の性悪説、③董仲舒の天人相関説については、「自然と落ち着いていくことを待つ」、「善政の君主下で自然災害が起こる」という内容は、おかしいと感じて欲しいということだろう。特に董仲舒の学習が「天人相関説」にまで至っていない生徒も多いだろうが、孟子の「王道政治」は自然と人間界の相関ではないが、その考え方を知っていれば、③は誤りだろうと推測できる。これも、広い意味で知識が前提にされているといえる。

①その思想が問われることの多いパウロは次の設問にゆずって、あえてペテロを設問として、キリスト教団の成立を問題としている。④スナナ派ではなく、シーア派の内容であるが、カリフやウンマという用語とともに、やや世界史的知識だともいえる。ただ、このような事実を知ること、思想の理解も深まるといえ、背景もしっかり学習しようというメッセージであり、日本史や世界史との関連を含め、歴史的背景にも広がるような授業を工夫したい。

問2 これは、一転して、試行調査問題に見られた前後の文脈を押さえながら空欄を補充していくものである。試行調査問題にあった空欄【 X 】として、その空欄の内容を隠したまま設問が展開される設問は、前述の通り今回の共通テストでは出題されなかった。ただ、空欄を類推しながら、そこに入る語句を選ぶというねらいは同じである。本問では、a・cに「福音」か「律法」のどちらかが入るのであるが、最後の信仰義認の内容から、cが「律法」であることに気づけば、同時にaが「福音」であることがわかる。パウロが非ユダヤ世界にキリスト教が広がるきっかけを作ったことを知らなくとも、bは「信じるものすべて」という記述から容易に正解が選べる。律法は食文化などユダヤ民族の民族性に根ざした固有の事項も多いこと、そして律法主義を批判し福音を信ぜよということは、ユダヤ世界の民俗宗教から、キリスト教という世界宗教への展開の鍵になった。これらのことを問う良問である。

問3 ④の内容であるピュロンに始まる懐疑派は、ヘレニズム・ローマ期にはストア派・エピクロス派に並ぶものだったともされるが、授業で触れることはまずない。ここでも細部にまでわたる知識の丁寧な理解が求められている。ただ、ピュロンを教えるかどうかということより、②の精神的快楽と肉体的快楽の違い、③「自然に従って生きよ」の意味など、ヘレニズム期など手薄になりがちな領域についても、このような設問にも対応できるようにしておきたい。

問4 ブッダゴースアという上座部仏教の教学者の著作からの引用で、作問者の意欲を感じる。しかし、問題そのものは、「慚愧」それぞれの内容が、資料・生徒の会話から読み取れば、さほど難しくないだろう。国語的な読解力だけで正解が導くことができ、倫理の問題としてはどうなのだろうと考える向きもあるだろう。今回の共通テストでは、同じような読解力・国語力が決め手となる問題が目立った。かつてセンター試験で、カントの難解な文章を、意外な日常的場面に置き換えた選択肢で問うというものがあつた。ねらいは同じで、難しい思想書の内容を、単に字面を追うのではなく自分自身の日常的な生き方、そして現代社会の諸課題と関連させて、具体的に理解できているかを問うものである。つまりは、そのような「生きた」思想を、いかにして生徒に身につけさせるかである。その一つの道筋として、生徒たちが自分たちの意見を交えて深めていくという「対話」の重視というのが、今回の共通テストの大きな柱の一つである。資料を使ったグループワークにも、様々なバリエーションを用意したい。

IIは、同じく「恥」をテーマにした生徒のレポートを手掛かりとした出題。

問5 ①十戒などの律法は「イスラエルの民が自ら定めた」ものではなく、神から授かったものである。

②王道政治と霸道政治、④全体的正義と部分的正義が逆になっている。知識を問うものであり、このような基本的設問も必要であろう。

問6 思想家相互の継承・批判といった関係を問うものである。②④は孟子・老子の説明は正しいが、資料の読み取りの誤り。③の読み取りは正しいが、前半の墨家の説明が誤り。思想の理解と資料が組合さった良問である。

問7 生徒とムスリムの留学生との会話という、今後増えてゆくと思われる場面を設定している。利子の禁止やシャリーア、「イスラーム銀行」の仕組みという、イスラームの具体的な姿を問うものである。ただ、bの選択肢「クルアーン（コーラン）やスンナなどに基づく」の「など」、「ムハンマドの言行録のみに基づく」の「のみ」という細部に注意しないと、ムハンマドの言行録（ハディース）もシャリーアの重要な法源とされていることを知っている生徒は迷っただろう。イスラームを単に六信五行のみを問う段階から、さらに深い理解を問うという方向はセンター試験から継続されている。

問8 先の問題と同じく、思想を比較・対照させる設問。ソクラテスとキケロの対立する意見を比較させるものであるが、やや単純、国語的に解けてしまう。対立する思想家を比較させ、どちらかの立場に立ち相手側を批判するというのは、グループワークやディベートの設定として多用されるだろうが、個々の思想理解を深めるのに役立つであろう。

## ■ 第2問 日本思想 (24点 小問8問)

Iは、日本における時間・人生世界観についての調べ学習が想定されている。

問1 『古事記』と『神統記』の比較という、日本思想と源流思想との比較という分野を横断した設問。

『古事記』の神が創造神・唯一神でないという知識と、資料の読み取りという読解力が求められた。

ガイアが女神，ウラノスが男神であることを念頭にすれば容易に読み取れただろう。また，4つの選択肢の構成が，前半・後半それぞれ2つの内容の組合せである，①AC，②AD，③BC，④BDという構造になっている。これは，他にも多用され，やや簡単な組合せといえる。今後，難易度を調整するにあたって，この形式の多用が続くかは不明である。

分野の横断という点では，同じ領域（源流・日本・西洋）の間だけでなく，この設問のように領域さえも超えた比較対照にも注目したい。授業の合間合間に，前に学習した思想家との類似点・相違点を質問したり，一定の領域の学習が終わったときに，複数の思想家を示して，類似・対立する思想家を考えさせたりするのもよい。多少無理があっても，古今・東西，似たような思想は見つけることができる。

問2 図版は，京都知恩院蔵の国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図（早来迎）」である。「末法」や「往生」，「阿弥陀仏」，「来迎」など，浄土教の考え方の理解が問われている。「先生の指摘→生徒の疑問→調べた結果」という流れを示しての設問というのが共通テストの目指す所であろう。図版を使った設問への対策では，「世界史」や「日本史」で使っている資料集などを活用し，レポートなどで生徒に調べさせるのも有効である。

問3 日本の仏教の理解を問う空欄補充組合せ問題。試行調査問題では，様々な要素の組合せ4択問題が多かったが，本問のような6択問題などにも慣れておきたい。

II 江戸期だけが時間論でなかったが，自分で作問してみるのも勉強になる。

問4 空欄補充の組合せ。「古文辞学」「上下定分の理」というキーワードが思い浮かべば簡単だっただろう。このように，用語を表に出さない設問に対しては，隠れたキーワードを探し出せるかが決め手になる。単なる用語の暗記では解けないようにする工夫である。キーワードを使わず，「○○字以内で説明せよ」などというのもよい練習になる。

問5 正誤問題。ともに基本的。井原西鶴がやや難しいが，彼の著作『日本永代蔵』や『好色一代男』などがイメージできれば解けたであろう。

III 当時のポスター「今日もまた流会か」（「時ノ展覧会記念絵葉書」大正9年）を手掛かりに，近代の日本思想を問う。

問6 「丸山真男」「小林秀雄」「吉本隆明」というやや新しい時代の思想家が扱われた。3人のうち2人が分かれば正答できるようには作られているが，学習が及んでいない生徒も多かっただろう。「雑居」・「意匠」・『共同幻想論』などのキーワードがわからなくとも，「主体性の確立」，「近代批評の確立」，「大衆の実生活」などの内容から思想家が特定できるようにしたい。このあたりはなかなか時間が割けない。国語の「評論文」「文学史」の知識と連動させたい。

問7 中江兆民・柳田国男・田中正造・南方熊楠の定番問題である。

問8 高村光太郎の芸術論を資料に，「芸術作品の永遠性」について考える設問。試行調査問題では，「芸術」の分野として，西洋絵画3点の図版をあげて考察させる問題があったが，今回の共通テストでは，このような設問は見送られた。その代わりに芸術についての資料読解問題が出題され，国語力・読解力で対応できた。美術や音楽などの知識を前提としないで，芸術の分野でどのような出題が可能なのか模索が続くだろう。個々の絵画・音楽の解説はできないにしても，○○主義の絵画・音楽として，思想と絡める形で代表的な作品を紹介したい。

### ■ 第3問 西洋思想 (24点 小問8問)

1 ページを最大限に使う、メッセージ性のある文章を生徒に投げかけ、じっくり文章を読み込むことを求める。これまでのセンター試験の形式の持つ意味は譲れないという作問者の強い意志を感じる。かろうじて、対話という形式は入れているが、他の大問のように、I・IIという部分に分けることや、「メモ」「レポート」という設定はされていない。

問1 青年期で扱われる人物であるエリクソンの文章からルターを問うという設問。ルターが、ドイツ農民戦争という現実を前にして、カルヴァンとは異なり「政教分離」の立場に立ったという事実を知っている生徒には、この資料の内容はやや意外に感じるかもしれない。ただ、資料そのものをきちんと読解すればさほど難しくはない。ルターの思想的な成長、その多面性に気づかされる資料を活用した設問である。

問2 扱われることの少ないデカルトの道德論である。①モンテーニュ、②モラリストには当てはまらない。④はデカルトの認識論・存在論としては正しいが、「高邁」の説明としては不適當。前問と同じく、思想家の全体像を考えさせる設問。

問3 青年期の分野で扱われるルソーの『エミール』からの出題。「身近な事例に置き換えた記述」という設定。国語力が決め手となっている。

問4 キルケゴールの実存の三段階が順を追って理解できているかを問うもの。試行調査問題では、「ロックの『統治論(市民政府論)』における説明を順に従って並べ替える」という設問があった。歴史系の問題では定番の、時間の順に従って並べるという設問に類するものである。「説明の順序」「論理の順」などという観点から思想を見直すと理解が深まる。同じような設問を、クイズ的に生徒に投げかけるのもよいかもしれない。

問5 社会主義についての定番といえる設問。

問6 フッサールの現象学についての正誤問題。アは「自然的態度」「エポケー」「事象そのものへ」というキーワードが正しく使われている。イがヘーゲルの「自己外化」だと気づけるかどうか、難しかった生徒もいるだろう。

問7 近年話題となった吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』からの設問。生徒同士の会話の趣旨から空欄を補充するもの。国語力が決め手となる。

問8 1 ページのリード文を読んだ生徒と先生の会話という設定。しかも、その会話が20行にもわたる。会話は生徒同士のものではなく、先生が生徒を導いてゆくという設定。これだけの文章量を前提とすると、1 ページに収めるため、選択肢が1行になってしまうこともやむをえない。リード文をじっくり読み、その趣旨を4~5行程度の選択肢で問うことで、テーマに従ったまとまりのある倫理的な思想の理解を問うという、センター試験の一つの到達点を今後どのように生かしてゆくか、現場の授業をどのようにするかともあいまって大きな課題といえるだろう。

### ■ 第4問 青年期・現代社会の諸課題 (28点 小問8問)

試行調査問題では、第4問が最も特徴的な大問であり、「学習のまとめとしての『課題探究』」という設定で問題が組み立てられていた。準備メモ・復習・調べ学習・発表原稿・生徒からのコメントという一連の流れに従って大問が構成されていた。

今回の共通テストでは、従来のセンター試験の第1問にならって対話によって問題が構成されている。

対話自体はテーマも明確でよくできており、設問も対話との関連性を保とうとしている。現代社会の倫理的諸課題の分野は、共通テストの方向性になじみやすいのか、まとまった大問になっている。ただ、この方向が次年度も続くかどうかはわからない。

問1 ①リオタール『『大きな物語』の復権」、②フーコー「普遍的理性に基づく絶対的な真理を探究」、③レヴィ＝ストロース「未開から文明へ発展」という誤りがはっきりしているので、④ヨナスの未来倫理を知らなくとも、正答を選べただろう。

問2 青年期の分野からの出題。パーソナリティについての定番問題。

問3 現代社会の倫理的諸課題の分野から、情報についての出題。リップマンを知らなくても、アが誤りだと気づけばそれだけで正答が分かる。

問4 青年期の分野からの出題。フロイトの心の構造と、「昨今のストレス理論」を生徒の具体的状況に当てはめた設問。

問5 バリアフリーの実例を、生徒の発言として出題。具体的例、生徒同士の会話という共通テストが求める設定。

問6 最初の会話文と有機的に結びついた良問である。「実験動物慰霊碑」を手掛かりにしているのもよい。国語的な力が試されるとはいえ、思想の内容の理解も必要である。

問7 統計資料読み取り問題。試行調査問題では、会話文の中に組み込まれ、空欄補充という形式で出題された。しかし、今回の共通テストでは、かつてセンター試験で数回出題された2ページにわたる統計資料読み取り問題の類問である。実験の手順の説明があり、その結果と分析という設定は同じである。かつては難問であったが、今回場面も整理されており、取り組みやすかったかもしれない。ある理論を説明する際、その裏付けとなった実験例などを示すと、生徒の理解が深まるだろう。

問8 会話文に下線を引いて選択肢とするのは、試行調査問題にも見られた形式。ただ本問は、会話に参加した人物の、誰の発言が適当でないかを選ぶものではなく、生徒P一人の会話のなかでの選択である。「上部構造」という部分の誤りに気づくかどうかだけの問題であった。

問9 最初の会話を踏まえ、レポートの空欄を補充するという設問。第3問と同様、設問全体のまとめとして、最初の会話文（リード文）を踏まえたレポート（会話）をもとに、全体の理解を問うという設問である。会話の中でPがどのような考え方を持っていたかを理解した上で、Qとの会話でどのように考え方を深めたかを、ベンヤミンを手掛かりに問うている。

## 4 共通テストの対策

### ■ 読解力・国語力をどう育てるか

今回の共通テストでは、読解力・思考力が決め手となった設問が目立った。国語力がないと悩んでいる生徒に対して、どのように指導すればよいのだろうか。

「国語力」は総合力である。一朝一夕には難しいが、学習を進めているうちに気が付けば身につけているというものである。資料をベースに生徒の会話やレポートなどを組合せるなど、様々な問い方がされたが、原典資料を読み込むというのが基本である。資料集がボロボロになる程に力がついてくる。資料集を生徒が自ら読み進めるようになればしめたものである。資料の解釈を教員が教授するのではなく、

生徒がまず考える。それを生徒間で交流し、正誤を競うのではなく、なぜそう考えたかを重視する。このような場면을授業の中でどれだけ設定できるかが試されている。

### ■ 具体的事例・現代社会の諸課題との結びつき

資料を読んで理解するという読解力が試されるのは、抽象的な記述を字面だけで分かった気になるのではなく、日常具体の場面に置き換えて理解できているか、さらには現代社会の諸課題の解決にいかに関活用できるか、においてである。それを問う設問も多かった。

そのために、先に述べたような、自ら資料の解釈をまとめるだけでなく、生徒同士で解釈を交流することで考えを深めることができる。グループワークなどを活用したい。

### ■ 分野横断・比較で有機的なつながりを

共通テストの特徴の一つでもあったが、理解を深めるために、時代・場所の離れた思想家を大胆に比較することも必要である。多少無理があっても、ある思想家同士の比較対照させる課題なども有効であろう。

### ■ 対話・課題探究の意義

会話の多用が共通テストの特徴の一つであった。自分とは違う意見・正しいかどうか分からない意見を理解する。そう考える理由や根拠を考えてみる。

また、共通テストで場面設定されている、課題探究・調べ学習・発表・レポートなど、実際に取り組んだことのある生徒には、話の流れはつかみやすいだろう。さらに、ディベート・ポスター発表なども、実際の進め方などは理解しておきたい。

### ■ 知識・理解が基本

知識・理解が基本であることに変わりはない。今回の共通テストでは、思いのほか細かい知識も問われた。知識と思考力は矛盾するものではなく、相互に補完的關係にある。

また、やや歴史的な事実も問われた。教科書や資料集の思想家の「略伝」、時代との関連、あるいは「コラム」の記事などが、手掛かりになることもある。「倫理」以外にも、「世界史」や「日本史」の資料集、国語便覧なども参考になる。広く関連づけて学習したい。

### ■ 相手の意見を汲み、自らの成長につなげる

今回の共通テストが完成ではない。今後、共通テストにも大きな変化があるだろう。合意を求めて、互いの意見を理解し合うというのが、共通テストの目指す所であろう。新教育課程の実施もにらみながら、授業の改善につなげたいものである。

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料(PDF)もダウンロードできます。



 第一学習社

広島本社

733-8521 広島市西区横川新町 7-14

TEL 082-234-6800